

▽エッセイ

映画「レミゼラブル」と書籍「森鷗外」

「しんぶん赤旗」の映画評で映画を観たり、書評で本を読んだりする。この正月の私がそうだった。

まず映画の「レミゼラブル」。

暮れのうちにそれを観た家族や友人から「わが家のアカデミー賞」とか「パリ蜂起で敗北する場面で明日は勝つと今の私たちが励まされる」と勧められていた。

しかし私は、「レミゼラブル」はフランスの「忠臣蔵」みたいなもので、いままで何度も映画化された型どおりのものではないかとの先入見から、映画館に出かける気分の高まりが持てないでいた。しかし1月13日赤旗の映画評「レミゼラブル 現代に響く民衆の讃歌」(評者—隅田哲)が私の身体を海老名シネコンに運ぶことになった。

映画はイギリス映画で(予告編ではユーゴ原作とも記して無かったとのこと!?)登場人物は英語で喋っているわけだが、内容はフランス大歌舞伎という感じ。冒頭の囚人労働の場面から、最後のパリ1832年6月蜂起バリケードの場面まで、心地よい詠唱場面の連続を居眠り無しで観ることができた。

ユーゴの原作は、小学生か中学生(旧制)のとき父親が何冊か持っていた古い世界文学全集で、セルヴァンテス「ドンキホーテ」と共に読んだ記憶だが、内容はすっかり忘れていた。ただ、パリの下水道の歴史が長々書かれていたことだけは覚えている。その場面は蜂起の敗北過程で行われる下水道を伝ってのジャンバルジャンとジャベールの角逐場面であった。

ところで、折角買ったのにツンドクになってしまう本がままある。山崎一穎『森鷗外』(新日本出版社刊)がそうなりそうだった。それを正月の読書対象に実際化させたのが1月6日赤旗の書評「定説に疑問 大胆で重厚な評伝」(評者—金子幸代)だった。

評者の金子さんは、90年代後半に神奈川外語短大を不当解雇され神奈川県職員組合の全面支援を受けて闘っていた人で、その当時、県職のある集会で私は彼女に「帝国陸軍将校でもある鷗外は天皇制についてどう考えていたのでしょうか」と尋ねたことがある。鷗外「かのよう」を読めばわかるとの答えだった。

読んで鷗外が近代合理思想の立場から絶対主義天皇制に深刻な疑問を抱いていることがわかった。今度の書評では、定説が鷗外折衷説である所に立てた山崎の異説を「立憲君主制から民主制に進むのが必然」と鷗外が見据えていたとの異説として高く評価している。

鷗外が大逆事件弁護人平出修に一週間夜間に自邸(本郷観潮楼=現森鷗外記念館)で欧州社会主義無政府主義について語り、被告らが「死んでも遺憾なし」と感激するような平出弁護陳述に資するといった危険な行為をしていたことなど、私はこの本で始めて知った。びっくりである。(一赤旗愛読者)

(日本共産党海老名東支部「日本共産党からみなさんへ」第9号2013年2月号寄稿)